

## 東京都・医療法人社団碧桜 秋葉原駅クリニック

〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町 2-1 大原ビル 4F  
https://ekic.jp

- 院長：大和田 潔
- 設立：2007年
- 診療科：内科



## 栄養管理で未来ビジョンを先取りする都市型クリニック

### 積極的な地域連携、多職種連携

東京・秋葉原。にぎやかな電気街として言わずと知れた場所である。しかし実は、秋葉原はいくつかのエリアに分かれており、それぞれの顔をもつ。秋葉原駅を挟んで電気街とは反対側に位置する神田佐久間町は、静かな空間で日本橋につながる旧問屋街の一角になる。医療法人社団碧桜 秋葉原駅クリニック（大和田 潔院長）は、そのエリアのJR秋葉原駅昭和通り口・東京メトロ日比谷線秋葉原駅4番出口前に位置している。同院は平成19年（2007）に秋葉原駅前の電気街側で開設されたが、機能性を高めるため平成29年（2017）に当地に移転した。

同院のあるビルを見上げてみると、4階の窓枠に「頭痛、アレルギー、一般内科、花粉、メタボのご相談」の案内が掲げられている。これを見ればおおむねこのクリニックの方向性が理解できる。とりわけ目を引くのがそのレイアウトで、専門外来表示の下に管理栄養士の文字が医師よりも大きく上段に書かれている。あまり見かけないこの表示が、同院の目指す医療推進の主張そのものであることを、今回の大和田院長へのインタビューで知ることになった。

秋葉原駅前の電気街側にて、10坪のクリニックとして開設した当時、重視したのは利便性を活かした栄養相談、頭痛などの専門外来と一般診療、および医療連携だ。ここを開業の地に選んだのは、東西の路線と南北の路線がクロスする場所と判断したからだった。当時少なかった脳神経内科専門医が行う頭痛専門クリニックの側面を活かすには、遠方の患者の利便性を考える必要があった。その結果、東京都内だけでなく、神奈川県、埼玉県、千葉県方面など、かなり広域な診療圏から患者が来院している。

医療連携に関しては、所属する東京医科歯科大学だけでなく、総合病院勤務時代の信頼関係から東京都内の大学病院や総合病院、各種専門科を標榜する



秋葉原駅クリニックの窓の案内 表示に同院の特徴が表れている。



「秋葉原駅クリニックへようこそ」 管理栄養士とともに

病院と、今でも患者の紹介と逆紹介が続いている。

また、秋葉原は近代的なビルが立ち並ぶビジネス街であり、メタボリック症候群を抱える人も多い。認知症は、糖尿病やメタボリック症候群がリスクを高め、発症してしまうとなかなか治療できない。脳神経内科医として患者を守るためには、栄養管理は避けられないと考えている。その願いが、管理栄養士による栄養指導に力を入れることにつながった。

## 管理栄養士による慢性炎症改善

現在、同院のスタッフは、医師が大和田院長のほかアレルギー専門医（東京大学卒）、神経内科専門医（東京医科歯科大学院卒）の3人、管理栄養士および看護師で編成されている。特に、管理栄養士の存在が同クリニックの大きな特徴の一つでもある。生活を整えることが基本であり、薬剤治療はそれを補完するものに過ぎないと考えているからだ。

メタボリック症候群が引き起こす慢性炎症は、人間の加齢変化を加速させ、さまざまな合併症の原因となる。この慢性炎症を予防するためには、栄養管理と運動しか方法はない。これまでの経緯を踏まえ、大和田院長はさまざまなメディアで解説も行ってきた。地中海式和食メソッドを通し、オメガ3、乳酸菌などの分野で食品企業の仕事もサポートしてきた。



薬剤に関する本を上梓したことで、『日経ドラッグインフォメーション』（日経BP）などの連載や取材記事に応える機会が増えた。



コメディカルを目指す若者をサポートするために、医療参考書も多数監修する。



数多くの健康管理やダイエットのレシピを管理栄養士と考案している。減量の取材も多く受ける。



「新版 頭痛」本文だけでなく中のイラストも大和田院長が描いた。（新水社、平成21年）



「健康推進コラボ談話・海苔で健康推進」和食には利点が多く、海藻食もその一つと考え、海苔で健康推進を応援している。<https://www.nori-japan.com>



『こどものおいしゃさん』小児科医の一日を描いた絵本。子どもたちが苦手な病院で働く医者も、自分の親と同じような生活を送る人間であることを伝える。診察風景の説明も子どもたち自身のために行われる作業であることに重点を置いた。(篠原出版新社、平成17年)



大和田院長が監修した『イラスト&図解 知識ゼロでも楽しく読める！人体のしくみ』（西東社、令和4年）の中に「一本分の雑学補給」（左）を掲載したことがきっかけで、大塚製薬「カロリーメイト」のインスタグラム用の原画を制作した（右）。

また、日本の海藻食文化である海苔食推進の動画も公開している。栄養分野や薬剤の分野でも複数の本を上梓してきた。「加齢によって引き起こされる慢性炎症である加齢炎症を抑えるためには、食事や運動といったライフスタイルが“老化加速の治療”になる」との観点から、現在は「健康長寿を目指す60歳からの食生活」のテーマで同院の管理栄養士と執筆中だ。

## 🔍 コメディカルのサポートと絵画

「看護師や薬剤師、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の国家試験に役立つ参考書の医療監修も頑張ってきました。医学生や看護学生の講師もしていましたし、薬剤師向け雑誌の連載もしていましたので、その延長線上のものです」と医療を志す若者を応援する熱意を語る。絵を描くことも得意としている。挿絵も自ら描いた頭痛治療の本や、インターナショナルスクールの生徒の保護者からの依頼を受けて、子どもが医療機関を受診する『こどものおいしゃさん』（篠原出版新社、平成17年）という絵本も出版した。絵・本文とも大和田院長によるものだ。

最近では大塚製薬「カロリーメイト」のインスタグラムの原画を制作した。俳句や茶道もたしなむ。「脳に見えるビジョンを共有するには、絵や俳句はとてもいい手段です。茶道は気持ちを鎮めます」と語る。

## 🔍 医療システム研究の経験

大和田院長は以前、「厚生労働科学研究 政策科学推進研究事業」における「医療等の供給体制の総合化、効率化等に関する研究」に携わり、全国各地の医療機関を訪れたことがある。病院が林立する大都市と郊外では医療形態は大きく異なるが、患者にとって有益なものは何かを考え続けた。そして、「在宅医療の総合化と効率化～医療情報伝達（medical information transporter：MIT）と医療生活計画（medical life planner：MLP）の重要性～」の論文として報告した（平成17年度）。

大和田院長は日本の医療システムをさらに改善するためには、複数の医療機関が患者の医療情報を共有し効率化する「医療情報伝達（者もしくは方法）：MIT」と、その場の目の前の治療だけでなくその人がどのように医療システムと関われば困窮しないで済むかという「医療生活計画：MLP」の概念が必要だと提唱した。その水先案内人的な役割を果たす人を「医療生活計画者」と考え、医師はその役割も持つべきだとした。

研究報告では、認知症患者や難病（パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）など）、悪性腫瘍、脳卒中後遺症の場合における医療連携の事例を紹介して課題を分析し、解決するた

めに必須の共通概念を創出した。「大切なことは、その人にとってどんな医療が良いのかビジョンを考え、患者さんや家族と共有することで」と大和田院長は語る。

さらに続ける。「私は医療には、医師、看護師、ケアマネージャー、管理栄養士などの多職種間の協力は不可欠で、場面によってリーダーは変化するべきだと思っています。大事なのは、コミュニケーションによる信頼をもとにして、患者さんをサポートするチームになることで

す。そうすれば公的サービスも利用しやすくなります」と。このようなチーム体制ができると、患者もその家族もチームの一員として積極的に“医療参加”しやすくなる。

救急医療や在宅医療、大学病院、総合病院で働いた経験と、俯瞰する医療システム研究の経験を統合し、開業し診療に当たっている。「病<sup>やまい</sup>を発症し有病になり合併症に対応するのではなく、未病状態から無病に戻す手伝いをしたい」と語る。



受付カウンター  
ゆったりとした空間で、  
大きな時計も印象的



Suica、PASMO での会計も可能



待合 広いソファが並び、待ち時間のストレスが少ない。



栄養相談室 その人それぞれに合った栄養相談を心掛けている。



診察室 2室あり、ip20 Einrichtung の家具で機能的なレイアウトになっている。



## 効率的なクリニックのレイアウト

では、院内を見てみよう。ビルの4階でエレベーターから降りて左手のドアを開けると、すぐに角丸の受付カウンターがある。「ビルの診療はどうしても狭くなって……」と開口一番、大和田院長は言う。「でも、以前の電気街側にあったクリニックはもっと狭かったんですよ」と。

受付右側が明るい待合ロビーで、10人以上は優に座って待てるソファがあり、広く感じられるよう工夫されている。カウンターを通り抜けた左右には2つの診察室がある。全て「ip20 Einrichten」（ドイツ製システム家具、エスプリプラン取り扱い）のものだ。

ip20 Einrichtenは、組み立て分解自由で耐久性が高く、壁を収納空間にすることが可能で、消毒薬にも強い性質を持っているため、ビルの狭い空間利用に最適と考え、選んだのだそうだ。現在のクリニックは、旧クリニックを分解し、移設移植できるものを最大限再利用してつくられている。「新規に購入する部材は半分で済みました。私がよく使っている第2診察室は狭いのですが、開業当初から使っている古い部材の部屋なので傷のひとつひとつにも愛着があるのです。ip20 Einrichtenはドイツではメルセデス・ベンツのショールームにも使われるぐらい合理的です」と語る。

## 未来のビジョンを先取りして具現化

受付カウンターの向かいにあるのが、いわば同院の特徴ともいえる栄養相談室だ。ここで管理栄養士が患者と相談することで、大和田院長の「慢性炎症を改善させる医療」というビジョンを具現化している。「リアルな相談室をつかって機能を継続し、結果を出すことで説得力を持つと思います。以前、医学会で、脳神経内科専門医が脳を守るためには管理栄養士と働くべ

きだと言ったときには、意味が分からないなどと概念を理解してもらえなくて笑われたこともありました」と頭をかく。

感染症の流行によって、メタボリック症候群がリスクファクターであることが注目されている。「そもそも“食”というものは人間が生きていく上で必須のもの。基礎的な免疫力を支える普段からの食や運動の生活習慣が重要です。この善し悪しで健康寿命も決まります」と語る。現在では日本臨床栄養協会理事に就任し、食品企業にアドバイスしたり、大妻女子大学で管理栄養士セミナーの講師を務めたりもしている。

一方で、食のエキスパートである管理栄養士の医療分野での活躍の場はなかなか広がらない。「管理栄養士の早期介入によって回復された方は、根本から人々を健康に導きます。特に若い人はほんのちょっとした工夫で改善します。さらに、術後でも、人工呼吸器からの離脱後でも、在宅の咀嚼や飲み込みが衰える高齢者でも、どのような人にとっても、栄養を支えることが機能維持や命につながります。ですから、管理栄養士が医療の現場や生活の現場で働けるスキルアップのお手伝いに長年尽力してきました」と熱く語る。

同時に「栄養指導後に疾患のデータ変化と一緒に考察することで、当クリニックが管理栄養士たちのスキルアップの場にもなっています。定期的に学会発表し共同で論文も書き、複数の本の執筆も続けてきました」と言う。「一緒に働く若い先生がアレルギーの本を出版したり、メディアに登場したりすることもお手伝いできました。良いスパイラルが生まれてきていると思います」と続ける。

「コンセプトを理解してくれる後輩の医師たちが引き継いでいってくれています。これからも研鑽を積みつつ、人々の役に立つその先の新しいビジョンを、これから出会うであろう人々とも協力しながら、物質化し具現化していこうと思っています」と語る。それが、秋葉原駅クリニックの目指す医療のカタチだ。